

# 〔Ⅲ〕 高校 2 年生の「研究旅行」

## ——総合学習のひとつの実践としての——

白 井 宏

### 1. 研究旅行

高校 2 年生の秋に行う旅行を、「観光旅行」とするか「研究旅行」とするかということが、2 年生になって新たに結成された旅行委員会（各学級より 2 名ずつ選出、計 6 名により編成）における最初の議題であった。委員会での討議、学級での話し合いを経て、「研究旅行」とすることに決定した。これは担任団（学校側）の意向でもあり、また本校においては伝統的に単なる観光旅行は行っておらず、いわば従来通りの決定でもあった。しかし、ともすれば安易に流れやすい風潮の中で、委員会・学級という生徒の公式の討議の場で原則的な話し合いを最初に行ったことは、旅行行事に対する生徒全体の意識を、いくらかでも高めるといふ意味があったように思う。

観光旅行にまったく意味がないわけではない。出会いがあり発見があり、そこには当然資するところの何かがあるに違いない。しかし、その出会いや発見も、十分な事前準備を前提すれば、より豊かでより確かなものになるであろうというのが、われわれの考えであった。自らの計画に基づいて行動することによって、三泊四日の旅行全体に生活を自ら律するという意識が生まれ、その結果つまらない事故が防止できるのではないかという担任団の功利的な意図もなかったわけではない。

### 2. 総合学習としての研究旅行

本校では従来、研究旅行三泊四日の日程の中の丸一日をあてて、ある地域におけるグループ研究を行ってきた。京都や山口県萩市がよく利用された。

昨年（1983 年度）は、生徒の希望調査をもとに、香川県高松市（及びその周辺）を、研究対象地域として選定した。

こういう、ある都市（地域）を特定し、そこをフィールドとしていくつかのグループ（班）がそれぞれのテーマを持ち、事前研究をし、実地調査をし、事後報告をするという方法は、われわれが構想している「総合学習」のあるべきひとつの実践の場だと考えている。国語や歴史・地理等に分化している教室の中の「授業」を、総合化・有機体化するひとつの契機とし

て、また、それらの「教科」の網目からこぼれ落ちるものを、社会の現場から学ぶ、という意味で。

ここにそのあらましを報告する所以である。

### 3. 旅行の全体像

研究旅行は、1983 年 11 月 8 日（火）～11 日（金）に行なわれた。その日程は次のようである。

第 1 日目（11 月 8 日 火）

名古屋——岡山——倉敷（大原美術館他）——宇野——高松（泊）

第 2 日目（11 月 9 日 水）

高松市を中心としたグループ研究（高松泊）

第 3 日目（11 月 10 日 木）

高松——宇野——岡山——広島（平和公園・原爆資料館）——忠海——大久野島（泊）

第 4 日目（11 月 11 日 金）

午前中自由行動——三原——名古屋

⑦ 第 2 日目の高松市（及びその周辺）における終日のグループ研究を、今回旅行のメイン行事とした。

① 第 3 日目の広島（平和公園・原爆資料館）見学を⑦に次ぐ重要行事とした。そのために、

• 10 月 15 日に、NHK 特集「君はヒロシマを見たか」のビデオを全員で見た。

• 10 月 29 日に、広島県原爆映画管理委員会より借りた「ヒロシマ・原爆の記録」を全員で見た。

• 当日（11 月 10 日）は、広島平和文化センター事業部長高橋昭博氏の講演を聴き、資料館を参観し、昼食後の自由時間には、平和公園内にあるたくさん慰霊碑巡りを勧めた。

② 第 1 日目、高松への途中、適当な見学地を吉備路に探したが（たとえば、閑谷学校など）、時間や交通の都合で実現せず、やゝ不本意ながら、倉敷大原美術館の見学ということになった。

④ 第 1 日目～第 3 日目はしっかり緊張して研究の実をあげ、最終日の大久野島（国民休暇村の施設全館借り切り、つまり島全体を借り切った形）においては思いきり解放的にすることにした。

### 4. 高松市を中心としたグループ研究

われわれは旅行全体を研究・学習の場として考えた

## 高校2年生の「研究旅行」

が、ここでは、その中のメイン行事とした「高松市を中心としたグループ研究」に限定して報告をする。以下その実施のあらましを、時間を追う形で述べてみる。

① 日程（11月9日）、フィールド（高松市及びその周辺）が決定した後、まず研究グループの編成を行った。いくつかの研究テーマを設定してからそれらへの興味や関心をもとにグループ作りをするというのが、順序としては正しいのかもしれない。しかし、日数はあっても旅行の準備（とりわけ、事務的なことなく研究の準備）のためにとれる時間は制限されていること、先にテーマを設定するには生徒達にとって高松という土地があまりに未知なものであること、さらにグループ作りは自分達の希望でやりたいという強い意向を生徒が表明したこと、などの理由から、グループ作りの作業を先行させることにしたのである。

グループ自体のまとまりやすさや、事前の準備・当日の行動の効率等から考えて、各グループ5～6名編成とすることを第1条件とし、やはり事前準備のやりやすさと担任教師による指導・掌握の便宜から考えて、同一グループは同一学級のメンバーによって編成することを第2条件とした。

その結果次のような編成になった。本校は1学年3学級であり、当該学年は、A組43名、B組45名、C組44名、合計132名であった。

A組 1班-6名、2班-5名、3班-5名、4班-6名  
（以上男子）、5班-5名、6班-5名、7班-6名、8班-5名（以上女子）

B組 1班-6名、2班-6名、3班-5名、4班-5名  
（以上男子）、5班-6名、6班-6名、7班-5名、8班-6名（以上女子）

C組 1班-6名、2班-6名、3班-5名、4班-5名  
（以上男子）、5班-5名、6班-5名、7班-6名、8班-6名（以上女子）

男女混成のグループが生まれなかったのは偶然だが、そこで、この研究グループを、そのまま生活グループ（旅館の部屋割りその他）としても利用することとした。そしてそれぞれの班の中で、班長1名、レクリエーション係1名、美化保健係1名、しおり作製係1名、研究係1～2名を決め、それぞれの係全体に、旅行委員が分担して付き、まとめて行くこととした。

② グループ成立後、各グループに、香川県・高松市の地図、各種パンフレット、時刻表、参考図書（「香川県の歴史散歩」山川出版社など）等の資料を与え、それぞれのグループの研究テーマ、当日の行動予定、そのための予算を、検討・作製させた。

教師側の指導や助言をも加えながら、最終的にできあがった各グループの計画の概要は次のようである。

### A-1「香川県の歴史散歩」

高松-多度津（桃陵公園）-丸亀（丸亀城）-高松

### A-2「高松と屋島の史蹟めぐり」

高松（高松城・弘憲寺・浄願寺・法泉寺・左甚五郎之墓）-屋島（屋島寺・談古嶺・安徳天皇社・菊王丸墓・弓流し跡・駒立岩・祈り岩・洲崎寺・射落島・総門跡・佐藤継信の墓・馬大夫黒の墓-義経鞍掛松）-高松

### A-3「醤油」

高松港-小豆島坂手港-田ノ浦-安田・苗羽の醤油工場-坂手-孔雀園-土庄港-高松港

### A-4「高松市」

玉藻公園-高松港-松島公園-栗林公園-香川大学-官庁街

### A-5「巡礼の面影を求めて」

高松-善通寺（善通寺・甲山寺・蔓茶羅寺・出釈伽寺）-国分寺（国分寺）-高松

### A-6「民話と特産物について」

高松-鬼ヶ島（女木島）-高松-屋島-四国村-高松

### A-7「『二十四の瞳』と民話」（壺井栄の故郷）

高松港-坂平港-田ノ浦分教場跡-草壁-紅雲亭-寒霞溪-銚子溪-土佐港-高松港

### A-8「丸亀のうちの歴史」

高松-丸亀（丸亀・うちの工場）-高松

### B-1「高松城と丸亀城」

高松-国分寺（国分寺）-丸亀（丸亀城）-高松（栗林公園・玉藻公園）

### B-2「高松&丸亀」

高松（栗林公園・玉藻公園）-丸亀（丸亀城・丸亀うちの工場）-高松

### B-3「栗林公園と四国村」

高松（栗林公園）-屋島-四国村-高松

### B-4「観光地の魅力」

高松-丸亀（丸亀城）-多度津-琴平（金刀比羅宮）-高松（栗林公園）

### B-5「志度寺をめぐる」

高松-志度（源内遺品館・もとや醤油館・地藏寺・志度寺・源内の墓・真珠島）-高松

### B-6「四国の民家と名古屋の民家」

高松-屋島-四国家家博物館-高松

### B-7「祭/名古屋と高松」

高松-琴平（金刀比羅宮）-高松

### B-8「海女伝説のふるさとをたずねて」

高松-志度（志度寺・海女の墓・三尊仏-お辻の井戸・源内の墓・源内遺品館）-高松

### C-1「四国放浪記」

高松-琴平（金刀比羅宮とその周辺を歩き回り研

究) 一栗林公園一高松市内散策

C-2「四国の郷土と歴史を学ぶ」

高松一志度(平賀源内旧宅・多和神社・多和文庫・志度寺)一高松

C-3「香川県民100人に聞きました。」

高松一丸亀(丸亀城)一琴平(金刀比羅宮)一栗林公園

\*インタビュー・アンケートによって、香川県民と名古屋市民との性格の違いを探ろうとする試み。

C-4「屋島めぐり」

高松一屋島(談古嶺・相生松・血ノ池他)一高松

C-5「仁尾太陽熱発電所一サンシャイン計画をあばく」

高松一観音寺一仁尾(太陽博会場)一観音寺一高松

C-6「平賀源内の一生」

高松一志度(源内旧邸・お墓・志度寺その他)一屋島一栗林公園一高松

C-7「屋島めぐり」

高松一屋島(城跡・屋島寺・獅子の霊巖・相生松・談古嶺)一高松

C-8「瀬戸大橋の建設にあたって」

高松一坂出一高松一志度一屋島一高松

\*児島坂出ルートの建設計画・現状・市民の反応を調査しようというもの。

③ 9月下旬に行われた学校祭において、旅行委員会の主導のもと、各グループの事前準備の概要を、展示発表した。

④ その後、学校祭に展示した掲示物を利用して、学年全体の前で各グループによる事前準備の中間発表をし、質問・助言を受ける会を持った。その間いくつかのグループは、丸亀市団扇組合・小豆島の醤油工場・志度町教育委員会等へ、事前連絡・照会・協力依頼等を、手紙電話で行った。

⑤ 11月8日、宿舎へ入ったあと、各グループとも最後の詰めミーティングを持った。それには、各方面担当の教師も立ち会った。

⑥ 11月9日、当日。

各グループとも、午前8時前後に旅館を出発。それぞれの目的地へ向かった。教師も、小豆島・県西部・志度町・屋島等各方面を分担し、随所で各グループと出会えるようにコースを決め、出発した。

それぞれのグループは、午前と午後各1回ずつ計2回、旅館で待機している教師にグループ及びメンバーの状態を電話で報告するようにした。

各グループ、16時~17時に帰宿した。

その後グループ毎に、ピー紙・マジックを使って、

研究発表のためのまとめをし、夕食後約2時間を使って発表を行った。

⑦ 名古屋へ帰った後、各グループで研究結果をまとめ、上下2冊合計550ページに及ぶ研究報告集を出版した。

## 5. 旅行を終えて

「研究旅行」を、名前だけでなく実質化するためには、ひとりひとりの生徒も教師たちも、事前事後にわたって、大変なエネルギーと時間とをそこに注ぎ込まなければならない。単なる観光旅行ということであれば、旅行社の用意したプランに乗って移動し、われわれは、危険や逸脱行為を防止するための注意さえすれば、それで行事は大過なく終わる。しかし、「研究」ということになれば、われわれはそこに何かを「創造」しなければならない。それに要する時間やエネルギーに見合うだけの成果が、果して望み得るのであるか。

また、事前にあれこれと調査することは、現地における出会いの新鮮な感動を減殺してしまうという面もあるのではないだろうか。それを超えるようなメリットは果してあるのだろうか。

グループ研究ということになれば、個々の生徒が経験することはいわば全体の一部であり、他グループの成果を含めた形でのひとつの大きな「経験」して総合化することは可能なのだろうか。

さらに、旅行委員会の強力な指導性の下に、「研究旅行」とする合意に達しはしたものの、個々の生徒の本音の部分においては、それに対する相当な反発があるものと思われた。そういう固苦しいものでなく、「気楽に」旅行をしたいのである。そういうものをどの程度克服することができるだろうか。

等々、当初さまざまな懸念や不安があった。そしてそれらの懸念や不安は、実は旅行の前日までわれわれの胸中を去らなかつた。

旅行委員と一部の生徒を除いて、大部分の生徒は、やはり「やむを得ず」事前研究をやっていたように思う。従って、学校祭における発表や、それに続く中間発表会においても、「研究旅行」に対する期待感や熱気は、いまひとつ盛り上っていなかったというのが、率直な感想である。

一方われわれの側にも、高校2年生の2学期まもなく運命の3年生、大学入試の影がちらつき始めるという時期に、それこそ高校時代最後の思い出として、「気楽に」旅をさせてやりたいという思いがないわけではない。また何か月も前から準備をさせることによってどうしても浮わつた気分になり、教科の勉強の方に何らかの悪影響が出るのではないかと、もっとこ

ちらの主導でもってあっさり旅行させるのがよいのではないかという考えも去来する。

それでもなおかつ「研究旅行」にこだわったのは、楽しければよい、真面目や真剣はグサイとする現代の風潮に対して、いくらかでも抵抗したかったということ。また、「気楽な」旅行は高校を卒業したあといくらでもできる、しっかりと事前研究をするというような旅を一度くらいは経験させたいということ。さらに、過程においていろいろ不満があったにしても、旅行後には必ず「よかった」と思うに違いないという自信（というより、そうあって欲しいという切なる期待）等の理由からであった。

そして当日。好天に恵まれたこともあって、結果は成功であったと言ってよいと思う。夕方、実に豊かな収穫と満足を持って、彼等は旅館に帰ってきた。私事になるが、実は筆者は香川県の生まれで、高等学校卒業時までこの地で過ごした。夕食後の各グループの発表は、その私にとっても、実にたくさんの発見と驚きに満ちたものであった。生々しい報告を聞きながら、彼らの逞しい行動力に感嘆し、わが故郷の見直しをさせられたのであった。

成功の原因のひとつは、今述べた彼らの行動力であろう。若さは臆するということがない。凶々しいとも言えるほどである。その若さで、金刀比羅宮の宮司に会う、仁尾町の町長さんに鋭い質問を浴びせる、志度寺の寺宝を見せてもらう、等々。

ふたつめには、彼等を受け入れてくれた、香川県民の暖い心をあげなければならない。報告会場で、旅行後に書いた感想文の中で、研究報告書の中で、彼らは異口同音に、香川県の人々の暖い協力と、出会いの感動とを熱っぽく語っている。

そして最後に、その素晴らしい出会いを可能にしたのが、彼等自身の事前準備であったということは最も重要な点である。たとえば、志度町教育委員会や丸亀市団扇協同組合へ、事前連絡や協力依頼をもししていなければ、あれほどの収穫は決して望めなかったであろうし、壺井栄を事前にしっかりと読んでいなければ小豆島での感激は、おそらく半減していたに違いない。分厚い2冊の報告書のページを繰りながら思ったのは、事前準備がしっかりしていたグループほどすぐれたレポートが書けているという平凡な事実であった。

こんどの旅行が、そういう意味で、彼等ひとりひとりのこれからの勉強や人生にとっての、ひとつの「意味のある経験」になって欲しいと願わずにはいられない。

最後に、旅行後の彼等の感想文集や報告書の中からいくつかを紹介したいと考えたが、あまりにもぼう大

であるため、その代わりに、旅行委員会の顧問として、終始生徒全体をリードし、素晴らしい「研究旅行」を創り上げた本校の丸山豊教諭の感想文を掲載して、この文のしめくりとしたい。（筆者は、高松でのグループ研究の行事を担当したのみである。）

### 一回りも二回りも大きく

#### （研究旅行をおえて） 丸 山 豊

研究旅行を終えて今一番心に残るのは、二日目、研究を無事済ませて井戸屋旅館に帰って来た時の君たちの充実した、喜々とした顔です。

その時、ボクはツーリストの小川さんと井戸屋のロビーで君たちの帰りを待っていました。「ただいま」と帰ってくるグループ全てに昨日迄の君たちの顔とは違った顔がありました。誰も疲れてぐったりしていないのです。それどころか、みんなそれぞれ何かをつかんだような、あるグループは、人との出会いの中での感動を堰を切ったように語り、またある班は、伝統家内工業のうちわを見せてその芸術性と労働のすばらしさに目を輝かせるのです。足で歩き、訪ね、語り、自分たちが積極的に真剣に働きかければ誰もが応えてくれることを知ったうれしさ、名も知らない高校生を、社会人として丁寧にもてなしている話して下さったという喜びを、皆争ってボクに話してくれるのです。ボクは「ウン、ウン」とうなづきながら、となりにすわっている小川さんに「どうですか、うちの生徒は」と誇らしげに語ろうとした時、彼は「こんな楽な添乗なら何回でもいい」と言ったのでした。午後5時までの帰宿—これを厳守するため、走り走り息をきらせてかけ込んできた男子生徒の団に、ボクたちだけでなく、井戸屋の御主人、お手伝いのおばさんたち皆、笑顔で、「おかえりなさい、ごくろうさん」

その夜の研究発表会は、辞書やガイドブックの写しの説明ではない本物の自分たちの言葉がありました。何かを伝えたい、今日の私たちの体験を語りたいという気持ちが伝わってくるものでした。

「自分の授業もこんなに生徒が生き生きしていたらいいなあ、生徒たちはこんなに力を持っているんだから」と、ボクも何かうれしくなってくるのでした。

今、この文を書きながら君たちの感想文を一枚一枚めくっています。その一枚一枚に、あの日以上の感動がこめられ、大きな輪となって広がっていく何かを感じるのです。一回りも二回りも大きく成長した君たちに少なからぬ驚きと羨望をもって、ボクの研究旅行は終わろうとしています。（後略）